

ホモ・ヴィアトール

—人間とは何か—

近藤 剛

はじめに

人文学とは人間の文化的営みを通して現れる精神的価値，歴史的時間，言語的表現といった知の在り方を考究し，人間性の実相に迫る学問であると言える。おおよそ，その学問的探究は「人間とは何か」という問いに収斂される。

「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」，これはフランスの画家ポール・ゴーギャンが描いた絵画のタイトルであるが，人間存在の根本問題を示すものとして，よく知られている。

この問いは，筆者自身の学問的な出発点でもある。単に理屈を積み重ねるだけではなく，この問いそのものを実際どのように引き受けて生きていくのかを常々，自分自身に問うている。客観的な「思惟」ではなく，体験的な「追思惟」，つまりヘーゲルやハイデガーを念頭に置いて言うならば *nachdenken* ということが重要であり，そのことを意識して，以下のような問題を設定したい。

本稿では「人間とは何か」という問いについて，「旅」をモチーフに考えていく。まず，人間の存在様態と旅の機能は，どのように関係づけられるのか。その手がかりとして，アメリカの歴史学者エリック・リードの見解を参照しておこう。

「歴史の黎明期には人間は移動する動物であった。記録に残された歴史——文明化の歴史——は，移動，移住，定住をめぐる物語であり，人間集団の土地への適応，人間集団の地勢への順応，「棲家」の創造をめぐる物語である。現代を理解するためには，過去において流動性が変化をもたらす力——人格，社会的光景，人間的地勢図を変容させ，地球的規模の文明化

6 精神文化学研究[第5号]

を産み出す力——としてどのように歴史的に機能したかを理解しなくてはならない」⁽¹⁾。

人間の存在様態や社会の生成変化に関わる「流動性」を具現化したものとして、旅の機能を捉えることができるのではないだろうか。リードから引用を続けたい。

「旅は肉体、風、大地の体験と同じくらいにありふれたものである。それゆえいつの時代でも、世界のどこでも、旅は言及の起点、象徴や比喩の基盤、意味の供給源になっているのである」⁽²⁾。

ここでは、リードの言う「象徴や比喩の基盤、意味の供給源」という旅の特徴に注目したい。そして、旅をより具体的に限定したいと思う。つまり、旅の起源として「聖地巡礼」を取り上げることにしたい。聖地を巡礼するという原初的な旅のモデルから、どのような人間像を描くことができるだろうか。

本稿でのキーワードは3点、第一に「聖地」、第二に「巡礼」、第三に「途上」である。これらの概念を手がかりにして、「人間とは何か」の問いに筆者なりの答えを見出したい。

1. 聖地

聖地とは何であろうか。それは人間を超越する「聖なるもの」が自ら顕現する特別な場所であり、生命や力の源泉として理解される。ルーマニアの宗教学者ミルチャ・エリアーデの言葉を借りれば、それは「ヒエロファニー」（聖体示現）の空間である。日常の時空から離脱して「聖なるもの」に接触するために、人は聖地を目指し、祈りを捧げようとする。聖地を目指す旅は過酷であり、いわば一種の試練でもある。ドイツの神学者ウド・

(1) エリック・リード著、伊藤誓訳（1993年）『旅の思想史—ギルガメッシュ叙事詩から世界観光旅行へ—』（叢書 ユニベルシタス 420）法政大学出版局、5-6頁。

(2) 前掲書、5頁。

トゥウォルシュカが「旅とは一種の成熟過程」⁽³⁾と述べているように、安全な居住地から離れて、未知の場所へ移動し、その都度に直面する試練を乗り越えて人間的に成長していく経験こそ重要であり、そのことが旅の意味を実存的に深化させる。

こうした旅の姿が『ギルガメッシュ叙事詩』や『オデュッセイア』などの「英雄神話」としても語り継がれていったと考えられる。旅の経験によって、人は自己変容を遂げ（体験する人を変容させる直接的かつ純粋な体験の原型としての旅）、それとともに自己同一性を得る（旅人に根深く現存しているものが旅によって表出される）。旅における自己変容と自己同一性の往還が、人格的自己の形成（創造的な進化と実存的な深化）に資すると解釈できるであろう。

ここで、世界各地にある代表的な聖地をいくつか取り上げてみよう。イスラームにおいては預言者ムハンマドの生誕地マッカがある。ムスリムには「五行」の一つである「ハッジ」が義務づけられており、人生に一度はマッカまで旅をして、カアバ神殿の周囲を反時計回りに回る「タワーフ」と、マスジド・ハラームにある二つの丘サファーとマルワを往復する「サアイ」を実践しなければならない。

ヒマラヤ山脈のカイラス山は、チベット仏教では宇宙の中心にある須弥山に見立てられ、またヒンドゥー教ではシヴァ神とその家族が住む聖なる場所と考えられ、さらにボン教やジャイナ教においても聖地と見なされている。両手、両膝、額を地面に投げ伏して、このカイラス山に絶対的な帰依を表す「五体投地」が特徴的である。

ヒンドゥー教における「母なるガンガー様」ことガンジス川での沐浴も有名である。インド北部を流れるガンジス川は、川そのものが神格化されており、沐浴すれば罪が清められ、遺灰を流せば輪廻からの解脱が得られると考えられている。

そして、キリスト教においては、サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂、サン・ピエトロ大聖堂、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂、サ

(3) ウド・トゥウォルシュカ著、種村季弘訳（1996年）『遍歴—約束の地を求めて—』（叢書 象徴のラビリンス）青土社、23頁。

ン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂といった四大バジリカを擁するローマ、フランス各地からピレネー山脈を経由してスペイン北部を通る「カミーノ」と呼ばれる巡礼路を行く、12使徒の一人である聖ヤコブの聖遺物崇拜が盛んなことで知られるサンティアゴ・デ・コンポステラ、キリスト教の聖墳墓教会のみならず、ユダヤ教の嘆きの壁、イスラームの岩のドームが並存するエルサレム、これらの三大巡礼地をはじめ、聖母マリアが出現したとされるフランスのルルド、メキシコのグアダルーペ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのメジュゴリエなどが有名である。

こうした聖地への旅は、それ自体が功德であって、享楽本意の物見遊山とは元来、関係がない。近年、観光資源化が進展し、伝統的な聖地から宗教性が失われていくのではないかと危惧されることがある。例えば、次のような指摘がある。

「古今東西を問わず、宗教現象は人間の観光行動と密接な関係をもっているが、わけても聖地巡礼がもたらす観光流動の実態や、それに附随する観光関連産業の発展、地域の社会構造変化などのテーマは現代社会を読み解く上でも重要なテーマである。現代社会の急速な変動は当然のことながら、宗教領域においても大きな変動を促しており、宗教現象に与える観光の影響を見逃すことはできない。観光化の進展にともなう聖地の変容は、観光関連産業の進出といった社会経済的な変化にとどまらず、聖地を支える宗教的リアリティーそのものの衰退をも招いているといえる」⁽⁴⁾。

また、サブカル的な聖地の急増（アニメの影響など）によって、擬似的な聖性が乱造される懸念もある⁽⁵⁾。つまり、ブームが過ぎたら終わるといって一過性の問題である。これは聖地の永遠性、永続性とは対極的なものでは

(4) 松井圭介（2013年）『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化—』筑波大学出版会、17-18頁。

(5) これまでは実在論の立場で聖地を考えてきたが、社会的・文化的な構築物としての聖地という社会構築主義の立場で捉えることも可能であろう。後者によれば、聖地とは人間が作り出した文化的な装置であり、聖なるものが実体として現われるものではないと考えられる。この点については、前掲書、4-6頁を参照のこと。

ないかと思われる。こうしたテーマは、近年よく論じられるようになった「宗教とツーリズム」の問題系⁽⁶⁾に属しており、それ自体としては興味深い。が、本稿の趣旨からは離れるので、このことをめぐる考察は他日に期したい。

2. 巡礼

次に、キリスト教思想の観点から、巡礼の意味について掘り下げて考えてみる。一般的に巡礼とは、感謝の祈りを捧げたり、罪の贖いを求めたり、超自然的な加護を望んだりする宗教的な行為だと言える。英語 *pilgrimage* の語源はラテン語 *peregrinatio* であり、それは故郷を離れていること、異郷にいることを意味している。それを受けて巡礼者 *peregrinus* は外地滞在者、寄留者と理解されるようになっていく。

キリスト教思想においては、この *peregrinus* の意味がより拡張されて、聖書的な信仰の在り方を表すものとして考えられていく⁽⁷⁾。つまり、キリスト教徒の本籍は天上にあり、この現世は異郷であるという理解である。この世は常に外地であり、寄留しているに過ぎない。神の民であるキリスト教徒は天上の故郷を求めて絶えざるさすらいの中にある。

したがって、教父アウグスティヌスが代表作『神の国』において論じたように、求めるべきは「神の国」(*civitas Dei*) の栄光であって「地の国」(*civitas terrena*) の世俗的な事柄に執着するべきではないのである。『神の国』第 14 巻第 28 章に記された有名な箇所を引用しておきたい。

「それゆえ、二つの愛が二つの国を造ったのである。すなわち、神を軽

(6) この点については、岡本亮輔 (2012 年)『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性—』春風社、星野英紀・山中弘・岡本亮輔共編 (2012 年)『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、山中弘編 (2012 年)『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』世界思想社などを参照されたい。

(7) この背景から「巡礼の神学」(ミヒャエル・ローゼンベルガー)のような構想が生み出される。cf., Michael Rosenberger (2005) *Wege, die bewegen. Eine kleine Theologie der Wallfahrt*, Echter Verlag GmbH.

蔑するに至る自己愛が地的な国を造り、他方、自分を軽蔑するに至る神への愛が天的な国を造ったのである。要するに、前者は自分を誇り、後者は主を誇る。なぜなら、前者は人間からの栄光を求めるが、後者にとっては神が良心の証人であり最大の栄光だからである。前者は自分を栄光としてそのこうべを高くし、後者は神に向かって「わたしの栄光よ、わたしのこうべを高くするかたよ」と言う⁽⁸⁾。

神に向かってこうべを高くする、すなわち、より高みを目指し続けるという意味で、この世界は「途上」(in via)であり、キリスト教徒は「旅する人」(viator)である、とまとめることができるだろう。このことから神学を「旅人の神学」(theologia viatorum)と特徴づけたのが、スイスの神学者カール・バルトであった。

このようにして、旅や巡礼の意味が信仰生活、ないし人生全体の象徴に拡張された。そうすると、地上にある聖地は、必ずしも終極的な目的地とは言えなくなるのかもしれない。しかし、そのことで聖地巡礼の宗教性が失われることは決してないと、筆者は考える。

なぜならば、そもそも聖地巡礼は修得的であり、目的地に到着すれば終わりということではなく、天上を目指す旅はそのまま模型的に、あるいは類比的に地上を漂泊する旅になり、ことに聖地を目指す旅はより高みを求める契機となり、「聖なるもの」との出会い、感化、触発は生きることの再創造につながると解釈できるからである。宗教的な巡礼は、より上の方へ向かって自己を開いていくように促す、実存的な経験に他ならない。

旅や巡礼として人生を捉える考え方、また「途上」や「旅する人」というキーワードについて、カトリシズムの背景を持ちつつ、実存主義的な考察を施した思想家がいる。フランスの哲学者ガブリエル・マルセルである。最後に彼の議論を取り上げることにしよう。

3. 途上

(8) アウグスティヌス著、泉治典他訳(2014年)『神の国 下』教文館、72頁。

マルセルの著作に『旅する人間』という論集がある。要点のみ指摘すると、マルセルは技術工学的、統計学的にカウントされるような、そこにある存在物として人間を規定することに疑問を投げかけている。そして、人格としての自己の把握を行うために、常に何かへと至る「途上」にあるというあり方、常に自らを「超えてある」というあり方に着目している。

マルセルの論文「私と他者」（1941年）から引用しよう。

「人間は自己を、存在として把握するよりはむしろ、自己であると同時に自己でないものを乗り越えようとする意志として、つまり、自己がかかわっている、ないしはかかわらされていると感じてはいるが、自己を満足させてくれない現実、自己が一体となろうとしている渴望にふさわしくない現実を乗り越えようとする意志として把握するのだ。個人の標語は、私はある（sum）ではなく、私は超えてある（sursum）である」⁽⁹⁾。

マルセルの所論を筆者なりに要約すると、次のようになる。人格としての自己の把握として重要なことは、デカルト的な「私はある」という認識なのではなく、存在が超越に開かれて、上に向かって「私は超えてある」という意志的な規定を持つことである。超えてある、上方に向かうということが、私たちの存在様態なのである。まさに人間であることは「途上」にあることであり、そのような存在者を *homo viator*、つまり「旅する人」と呼ぶ。

なお、マルセルの *sursum* はカトリック教会における *Sursum corda* を想起させる。これはミサでの叙唱前句であるが、その謂いは「心を込めて神を仰ぎ」となるが、人間の根本的なあり方を探る上で、実に意味深長であると思われる。

むすび 超越への志向性

スウェーデンの生物学者カール・フォン・リンネは『自然の体系』（1735

(9) ガブリエル・マルセル著、山崎庸一郎・白井健三郎・伊藤晃共訳（1968年）『旅する人間』（マルセル著作集4）春秋社、32頁。

年)で *homo sapiens* という人間の定義を提唱した。ホモ・サピエンスとは「知恵ある人」の意味である。フランスの哲学者アンリ・ベルクソンは『創造的進化』(1907年)で *homo faber* という人間の定義を提唱した。ホモ・ファールベルとは「工作する人」の意味である。

人間を特徴づけるものは、知性による思考と道具の制作である。それこそが人間の創造的な活動性を表している。人類の歴史は知恵と工作によって支えられてきた。これはまぎれもなく事実である。このことについて、その恩恵を被っている筆者に異議を唱えることはできない。

しかしながら、人間の知恵と工作は偉大な成果を生み出しつつも、時に暴走することはなかっただろうか。現代文明において、その弊害を目の当たりにし、その限界を反省させられているのではないだろうか。

本稿で提示した *homo viator* 「旅する人」という人間の定義は、未来社会への展望に何らかのヒントを与えるものにならないだろうか。超越への志向性、すなわち、自分を越えたものに自分が開かれてあるという意識、ひいては自分自身では自分の存在に意味を与えられない限界のある存在でしかないという自覚、ゆえに「途上」にあるという根源的な謙虚さを備えて生きるということ⁽¹⁰⁾、このことは人間性を育む上で決定的に重要なことであると、また現代人が取り戻さねばならない価値観であると、筆者は主張したい。

聖なるもの、超越性、これらはデータやエビデンスなど数値的に示せず、物量的に可視化できないが、言葉で語ることはできる。人文学の粋は言葉なのである。言葉にこそ、精神の価値が宿るのである。筆者は、その言葉を語り、書き記し続けたいと思う。人は<精神的生>を全うしようとするかぎり、真の高みを目指す思索の旅を続けることができるはずではな

(10) この謙虚さについては、補足としてノルベルト・オーラーから引用しておく。「巡礼は旅の途上で、目的地で、よその土地の方が美しいこと、経済と交通、法と制度が、故郷で慣れ親しんだものよりもおそらく発達している、また都市も大きく王国は力強い、ということを知ったのだ。そこから、自分の限界と狭さについての知識が生じえ、それが、異国、異文化とのかかわりにおいて計り知れない利点となった」(ノルベルト・オーラー著、井本响二・藤代幸一共訳(2004年)『巡礼の文化史』(叢書 ユニベルシタス 797)法政大学出版局、274頁)。

いだろうか。

【参考文献】

エリック・リード著，伊藤誓訳（1993年）『旅の思想史—ギルガメッシュ叙事詩から世界観光旅行へ—』（叢書 ユニベルシタス 420）法政大学出版局。

ガブリエル・マルセル著，山崎庸一郎・白井健三郎・伊藤晃共訳（1968年）『旅する人間』（マルセル著作集 4）春秋社。

星野英紀・山中弘・岡本亮輔共編（2012年）『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂。

ノルベルト・オーラー著，井本响二・藤代幸一共訳（2004年）『巡礼の文化史』（叢書ユニベルシタス 797）法政大学出版局。

松井圭介（2013年）『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化—』筑波大学出版会。

Michael Rosenberger (2005) *Wege, die bewegen. Eine kleine Theologie der Wallfahrt*, Echter Verlag GmbH.

Myra Shackley (2001) *Managing Sacred Sites: Service Provision and Visitor Experience*, Thomson Learning.

岡本亮輔（2012年）『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性—』春風社。

岡本亮輔（2015年）『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで—』中公新書。

ヨアン・ペテル・クリアーノ著，桂芳樹訳（2021年）『異界への旅—世界のシャーマニズムから臨死体験まで—』工作舎。

ウド・トゥウォルシュカ著，種村季弘訳（1996年）『遍歴—約束の地を求めて—』（叢書 象徴のラビリンス）青土社。

山中弘編（2012年）『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』世界思想社。
ノルベルト・オーラー著，藤代幸一共訳（2014年）『中世の旅』（叢書 ユニベルシタス 274）法政大学出版局。

※本稿は2021年12月4日に開催された京都産業大学文化学部開設20周年記念シンポジウム「<旅>を旅する」（むすびわざ館ホール）で発表した「ホモ・ヴィアトール—旅の途上にあるということ—」の内容に基づき，修正加筆を施したものである。